

令和5年度 地域福祉コーディネーター 活動報告書



令和5年度 地域福祉コーディネーター活動報告書

目次

●はじめに	1
●地域基礎データ	2
●地域福祉コーディネーターの誕生とその変遷	3
●地域福祉コーディネーターの役割とその使命	4
●令和5年度 第4次 伊賀市地域福祉活動計画 推進ハイライト	5～6
●数字で見る地域福祉コーディネーター活動と地域福祉活動	7～8
●重層的支援体制整備事業の全体像と全方位型アセスメントについて	9
●事例選定会議及び事例検討会議	10
●重層的支援体制整備事業 相談数・連携先等データ	11～12
●「伊賀市ひきこもりサポーター」との1年を振り返る	13
・ 家族会（研修と家族会の発足）	13
・ ひきこもりサポーター 定例会	14
・ ひきこもりサポーター 地域啓発 / 今後に向けて	14
●地域課題を解決する団体へのファンドレイジング支援について	15～16
●地域福祉ネットワーク会議 設置状況	17
●令和5年度 地域福祉ネットワーク会議連絡会 研修会	18

●市民ふくし大学【基礎講座】第24期 いが見守り支援員養成公開講座	19
●地域食堂連絡会・研修会	20
●令和5年度 夏休みふくし体験教室	21
●令和5年度 福祉教育推進協議会 研修会及び福祉教育推進協議会	22
●令和5年度 福祉教育プログラム実践（小学校）	23
●令和5年度 福祉教育プログラム実践（中学校・高等学校・専門学校）	24
●令和5年度 福祉教育プログラム実践（地域）	25
●福祉教育プログラム実施内容の実績	26
●FUN・FAN プロジェクト	27
・①支え合いの基盤となる新たなツールの創出	28
・②既存ではいなかった人材の育成及び活用	28
・③住民が集う居場所となるプラットフォームづくり	28
●令和5年度 フードパントリー	29
●地域福祉コーディネーター活動報告会	30
●寄稿 地域福祉コーディネーターへのメッセージ	31
皇學館大学 現代日本社会学部准教授 大井 智香子 氏	



はじめに

この度は、伊賀市社会福祉協議会が地域福祉コーディネーターを配置してから7年目の節目に際し、本報告書をお手元にお届けできることを心から嬉しく思います。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響が私たちの活動に大きな挑戦をもたらしましたが、地域社会との連携を深め、多くの課題に対処して参りました。

精神的健康問題が顕著になる中、特に心理支援の体制を強化しました。ひきこもりの人々やその家族への支援を拡張し、家族会発足に至りました。市街地にブックカフェ兼地域食堂がオープンするなど、地域の支援基盤を広げることができました。また、地域食堂の連絡会の発足も、この取り組みの一環です。

食糧支援では、「フードパントリー」や「フードドライブ」を通じて、生活困窮家庭や孤立しがちな子育て世帯等への支援を継続的に行い、多くの市民や企業から支援を得ることができました。

他の福祉機関やボランティア団体とのパートナーシップを一層強化し、共同で支援プログラムを開発することで、経済的に困窮している家庭だけでなく、孤独を感じている高齢者や若者に積極的にアプローチしました。

この一年間で直面した困難は多かったものの、地域社会と協力し合うことの重要性を改めて実感しました。私たちは、困ったときに「助けて」と言えるまちにして、地域の皆さんの主体的な参加によって地域をよくしていく取り組みに、引き続き全力を尽くして参ります。

報告書の作成にあたり、多くのご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今後ともご指導並びに地域福祉への積極的なご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

令和6年6月

伊賀市社会福祉協議会

会長 平井 俊圭



地域基礎データ

令和6年3月末現在

	伊賀市	上野	島ヶ原	大山田	いがまち	阿山	青山
人口（人）	85,340	54,670	1,913	4,707	8,979	6,279	8,792
世帯数（世帯）	40,448	26,698	812	2,032	4,115	2,710	4,081
高齢化率（％）	34.1％	31.1％	49.4％	39.6％	37.6％	38.8％	39.7％
住民自治協議会 （数）	39	22	1	3	3	4	6
自治会・区（数）	279	157	8	25	28	29	32
地域福祉 ネットワーク 会議設置（数）	38	21	1	3	3	4	6
民生委員児童委員 協議会（数）	14	9	1	1	1	1	1
民生委員 児童委員 （人）	304 定数：311	161 定数：167	12 定数：12	28 定数：28	32 定数：32	34 定数：34	37 定数：38
介護予防サロン 支援事業（市） 登録（数）	9	4	—	—	2	1	2
ふれあい・いきい きサロン （共同募金配分金 事業助成サロン） （数）（R5.4月 末現在）	237	117	10	19	40	22	29
見守り支援員 （R5.12月末現在 （人））	855 （その他 176、合計 1031）	486	28	50	102	70	119

I 時代背景

地域福祉コーディネーター及び類似の活動は、全国各地で始まり、主なものとして、平成 14 年に神奈川県社会福祉審議会答申において、「地域において課題やニーズを発見し、受け止め、地域資源(サービス等の情報・人・場所)をつなぎ、具体的な解決へ導くことができる人材」を地域福祉コーディネーターとして位置付けている。平成 16 年には大阪府が、概ね中学校区単位で地域における見守り・発見・相談・つなぎの機能を担うコミュニティソーシャルワーカーを配置するコミュニティソーシャルワーカー機能配置促進事業を開始し、平成 19 年には宮崎県において地域福祉コーディネーター養成研修が始まった。

II 地域福祉コーディネーターの役割

住民の地域福祉活動は住民同士の支え合いであるが、時には住民では対応できない困難で複雑な事例に遭遇することもある。住民の地域福祉活動がうまく進むよう、住民間や住民と様々な関係者とのネットワークをつくり、地域の福祉課題を解決するための資源の開発を進める必要もある。住民の地域福祉活動を支援するため、一定の圏域に、専門的なコーディネーターが必要となり、住民の地域福祉活動を推進するための基盤の一つであることから、市町村がその確保を支援することが期待される。

平成 20 年 3 月に厚生労働省から出された「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」(地域における『新たな支えあい』を求めて―住民と行政の協働による新しい福祉―)の中では、「地域福祉のコーディネーター」の役割として、

①専門的な対応が必要な問題を抱えた者に対し、問題解決のため関係する様々な専門家や事業者、ボランティア等との連携を図り、総合的かつ包括的に支援する。また、自ら解決することのできない問題については適切な専門家等につなぐ。

②住民の地域福祉活動で発見された生活課題の共有化、社会資源の調整や新たな活動の開発、地域福祉活動に関わる者によるネットワーク形成を図るなど、地域福祉活動を促進する活動を実施することが求められる。

よって、地域福祉コーディネーターは、①「個別支援機能」と②「地域支援機能」の 2 つの機能を併せ持っているといえる。

III 社協エリア担当制⇒市委託事業としてのスタート

伊賀市においては、合併間もない平成 19 年度から市内 6 カ所に「ふくし相談支援センター」を、旧在宅介護支援センター 9 カ所を「高齢者ふくし相談室」として再配置、平成 21 年度から平成 23 年度に実施した国のモデル事業「安心生活創造事業」により、当会がエリア担当者制を導入した。

第 2 次伊賀市地域福祉計画(平成 23 年度～27 年度)において、県の補助事業である「地域支え合い体制づくり事業」を受けながら、平成 25 年度から市委託事業として地域福祉体制づくり事業が創設され、協議体の設置を伴う地域支援に重点に置いた地域支援体制の確立が進められてきた。

更に第 3 次伊賀市地域福祉計画(平成 28 年度～令和 2 年度)の策定にあたって、厚生労働省から「地域包括ケアシステム」の確立に向けた生活支援コーディネーターの配置や協議体の設置が示されたことにより、従来のエリア担当者を専門職の「地域福祉コーディネーター」として配置し、伊賀市自治基本条例に基づいて設置された住民自治協議会¹を単位とした協議体「地域福祉ネットワーク会議」の設立を進めてきた。第 4 次伊賀市地域福祉計画(令和 3 年度～7 年度)の策定後も継続して推進している。

現在では、協議体コーディネート事業、継続的支援事業、参加支援事業、生活困窮者等のための地域づくり事業として地域福祉コーディネーターが配置され、39 の住民自治協議会を担当している。

¹ 「自治協」と略す場合がある。

地域福祉コーディネーターの役割と使命

事務局長 田邊 寿

◆地域福祉コーディネーターの役割

地域福祉コーディネーターの役割には、大きく地域への支援と個別の支援がある。

地域への支援には、地域福祉に関する活動支援がある。地域資源の把握や社会資源のネットワークづくり、人材の育成、まちづくり計画や地域福祉活動計画、地域福祉計画などの策定支援、情報提供・情報支援、研修会の企画・開催などがある。

地域福祉コーディネーターとしては、地域支援計画を作成し活動支援をおこなっている。

また、個別や地域課題の解決に向けた地域の体制づくりがある。地域資源の把握、社会資源の開発、身近な地域での話し合いの場づくり、福祉教育、地域福祉ネットワーク会議の組織化・運営支援などがある。

個別の支援には、支援を必要とする人の発見、相談支援、支援者との関係調整、サービスの利用援助、関係機関との連携によるサポート体制づくり、課題やニーズの伝達や情報提供がある。困りごとを抱えた方への寄り添い支援にも積極的に取り組む必要がある。

第4次伊賀市地域福祉計画には、これまで積み上げてきた伊賀市独自の地域包括ケアシステムをベースに、地域共生社会の実現をめざすべく取り組みが明記されている。

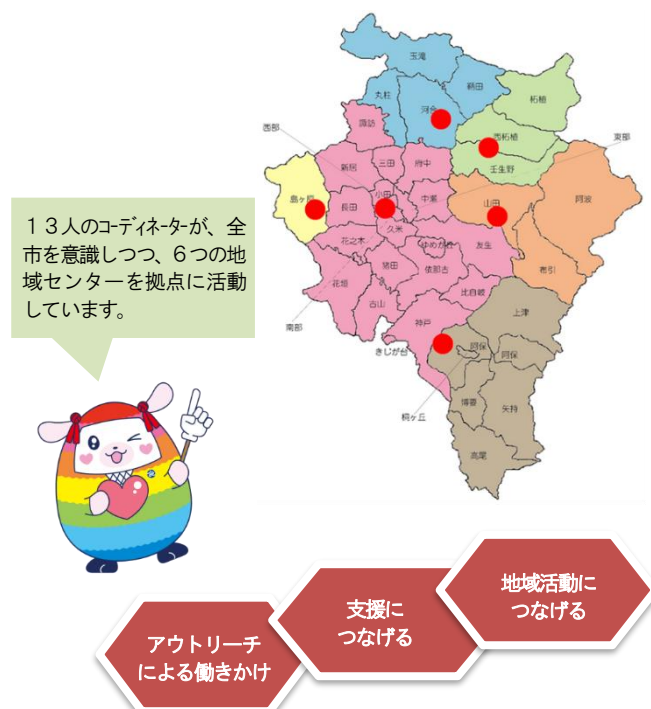
- 持続可能なこれからの地域づくり
みんなでつくる地域福祉コミュニティ
- 多様な主体による連携したしくみ
多機関の連携による福祉の「わ」づくり
- つながりあえる関係
つながりあえる地域づくり
- 安心した暮らし
安心と安全のまちづくり
- 続けられる地域の活動
これからの人材を育成するしくみづくり
- 困りごとを抱える人に寄り添う
生きづらさを抱えた人に寄り添う社会づくり
(伊賀市地域福祉計画 (6つの充実)より抜粋)

◆伊賀市流地域共生社会の実現をめざして

近年、介護や認知症、移動手段、社会的孤立、8050問題、地域の担い手の不足など、地域の福祉課題に加え、住宅施策、教育施策、多分化共生施策など、制度や分野ごとでは解決できない複雑化・複合化した課題が増加している。また、人口減少や地域のつながりの希薄化により、地域での支え合いやつながり合う基盤は徐々に弱まっている。

地域福祉コーディネーターは住民一人ひとりが安心して生活でき、住みやすい地域をつくと共に、支え合いやつながりを強め、一人ひとりが何らかの役割をもって、いきいきと暮らしていけるために、支援が必要な人や、人の役に立ちたいと考えている人や組織など、住民や関係機関等をつなげ、地域の状況を把握し、課題の発見から解決に向けて協働で推進していく役割がある。

複雑化・複合化している課題に対して寄り添い支援の実践と重層的支援体制整備事業等による地域共生社会の実現に向けて、具体的活動の展開に取り組んできた。地域福祉コーディネーターは住民や関係機関、企業等と共に、さりげない見守りや声かけ、おたがいさまの地域づくりをすすめ、孤立孤独を防ぎ、ふだんのくらしを幸せに思える、誰もがつながりあえる地域づくりをめざしている。



令和5年度 第4次伊賀市地域福祉活動計画 推進ハイライト

「第4次伊賀市地域福祉活動計画」では、身近な生活課題のうち、特に取り組みが必要な12の生活課題を明らかにし、どのような社会を実現したいか、12の目標(=インパクトゴール)を設定しています。

生活課題のための対策活動に、ボランティアやNPO、団体や専門職等関係機関、事業所、企業など多様な主体の協力を得ながら取り組んでいます。

① 孤立・孤独



孤立・孤独のない社会の実現



日本人の2.5人に1人が孤独を感じているとのデータも。「望まない孤独・孤立」にある人を取りこぼさないよう、本人や周囲の人が福祉関係者等の相談支援に繋がることや、居場所づくりなどを支援しています。

④ 地域活動運営



持続可能な地域行事や地域活動等の実現



地域活動に関わる人の増加を目指して、市民ふくし大学講座 いが見守り支援員養成講座において、全ての人に居場所と役割があることの大切さを学ぶ機会や、さまざまな専門講座を開催しました。

⑤ 災害



避難行動要支援者の『安心・安全』と、被災者の『早期通常生活復帰』の実現



能登半島地震で被災した、氷見市及び輪島市の社協支援活動に出動。被災者ニーズ調査の同行、支援金募集などをサポート。日頃の助けあい活動が重要であるという学びを活かして地域支援に務めています。

⑧ 新型コロナウイルス



新型コロナによって発生した新たな日常生活課題の解決 生活困窮から脱することのできる機会が公平にある社会の実現

⑨ 生活困窮



新型コロナウイルスの影響によって経済的に受けていた方が、コロナの資金貸付の返済の時期を迎えています。返済でお困りの方の償還免除や猶予のご相談にも応じています。

⑩ 子どもの貧困



全ての子どもが、食事や学習の機会、生活必需品、愛情など、育つために当たり前に必要な環境が得られる社会の実現



全ての子どもが、食事や学習の機会、生活必需品、愛情など、育つために当たり前に必要な環境が得られる社会の実現に向けて、子どもの貧困問題の根本解決に向けたプロジェクトを始動しました。

②認知症



認知症を原因とした行方不明による死亡者をゼロに



全国の行方不明者のうち、高齢者の殆どが認知症状のある人でした。ひとり歩きが始まって早く気付く取り組みの一つとして、市主催の「認知症高齢者安心見守り声かけ訓練」をサポートしました。

③健康寿命



伊賀市の健康寿命と平均寿命の差の減少



健康上のトラブルによって日常生活が制限されず、自立して過ごせる期間である「健康寿命」を伸ばす取り組みとして、認知症・介護予防教室や家族介護教室を開催し、講師派遣もしています。

⑥移動困難



自分で車を運転できなくても、病院や買い物に行くことができる社会の実現



移動困難の課題解決に取り組む地域の情報交換の場づくりの支援を実施。その他、食料品アクセス困難の可能性のある地域を分析も始めました。今後も地域内での送迎の仕組みの充実に向けて支援します。

⑦マイノリティ



外国人・障がい者・LGBT等のマイノリティで生きづらさを抱えている市民の減少



多文化共生 NPO 団体や外国人防災リーダーの協力により、やさしい日本語を使った外国人住民の避難所受付シミュレーションを実施。文化の違いを尊重し、お互いに理解することの大切さを学びあいました。

⑪住まい



高齢・障がい・貧困等で住まいを確保できない人をなくす



高齢者や障がい者など、民間賃貸住宅の入居を断られる人がいます。当会は国交省の居住支援協議会伴奏支援プロジェクトに選定され、行政と民間不動産事業者を交えた意見交換などを進めています。

⑫終活



本人が望む『最期までの生き方と逝き方』ができる社会の実現



終活や相続に関する相談が増えていることから、終活セミナーを開催。デジタル遺産の相続方法や、遺言書を書いておくことで、相続トラブルを回避できるなど、終活の進め方を啓発しました。

数字で見る地域福祉コーディネーター活動と地域福祉活動

◆地域支援課 活動統計報告（令和4年度～令和5年度）

支援内容	令和4年度	令和5年度	増減
1. 地域支援件数	6,635 件	5,715 件	－920 件
2. 個別支援件数	2,465 件	1,699 件	－766 件
3. 人材育成 ※1	172 件	163 件	－9 件
4. 啓発 ※2	111 件	110 件	－1 件
5. 研修（社協職員向け）	210 件	193 件	－17 件
6. 調査研究 ※3	14 件	8 件	－6 件
7. 社協事業	2,230 件	1,910 件	－320 件
8. その他 ※4	475 件	303 件	－172 件

- ・ 令和4、5年度の地域福祉コーディネーターが行った支援内容の総数である。
- ・ 令和4年度から業務日報の様式を一新した。業務種別を区分けしたことで業務内容がより明確化された。更に令和4年度までの報告は事務業務も数字として挙げていたが令和5年度から項目を無くし、より実践的な業務のみを集計した結果昨年度よりそれぞれの件数が減少したと考えている。

※1：ボランティア対応、実習生対応、NPOからの相談対応等

※2：社協PR、取材対応等

※3：学会発表準備、外部団体との研究等

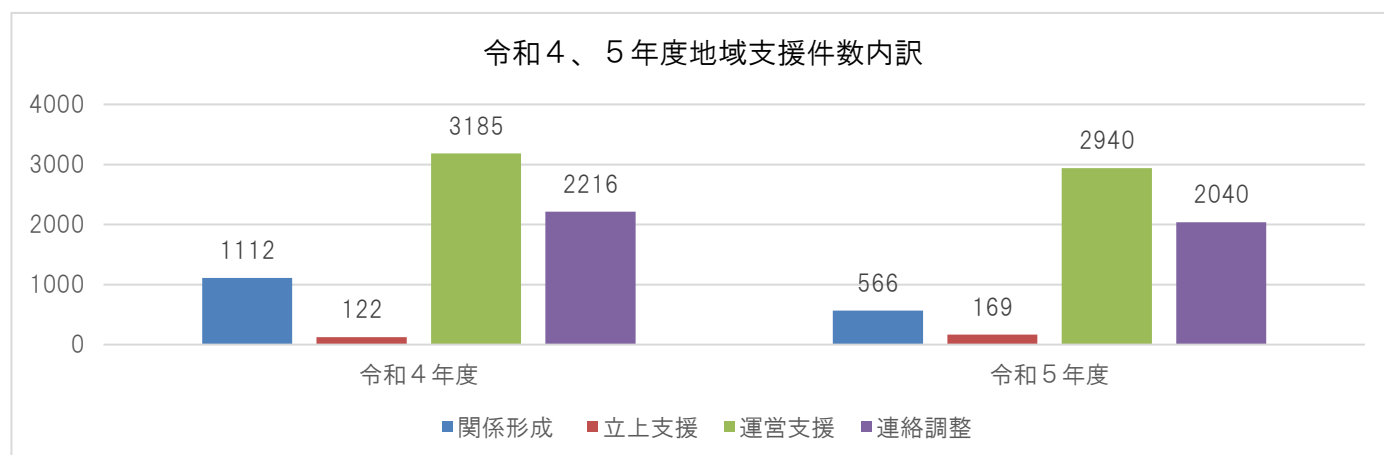
※4：社協内事業の仕事、伊賀市以外での仕事、全国的な活動等

◆地域支援課 地域別支援数（令和4年度～令和5年度）

エリア	令和4年度	令和5年度	増減
1. 県外	42 件	40 件	－2 件
2. 県内	38 件	23 件	－15 件
3. 全市	715 件	628 件	－87 件
4. 上野	4,377 件	2,805 件	－1,572 件
5. いがまち	1,032 件	871 件	－161 件
6. 島ヶ原	357 件	419 件	＋134 件
7. 阿山	597 件	667 件	＋70 件
8. 大山田	1,039 件	1,092 件	＋53 件
9. 青山	978 件	769 件	－209 件

- ・ 令和4、5年度の地域ごとに支援件数を集計したものである。
- ・ 令和5年度は前述の通り件数が減少しているところが多い。特に上野地域に関してはコーディネーターの長期離脱や異動も重なり件数の減少が著しい。職員体制を整えて令和6年度は地域支援を行っていく。また令和5年度は震災の影響を受けた富山県氷見市や石川県輪島市への被災地支援や他都道府県を跨いだ研修、社協との連携などオンラインではなく現地に足を運ぶ機会が増えた。

◆地域支援内容内訳



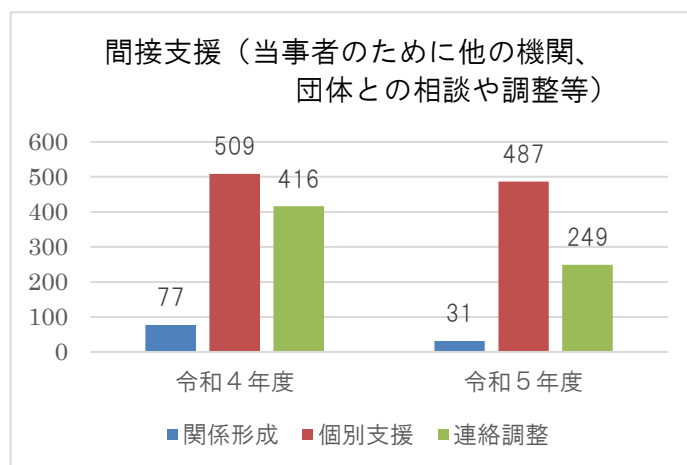
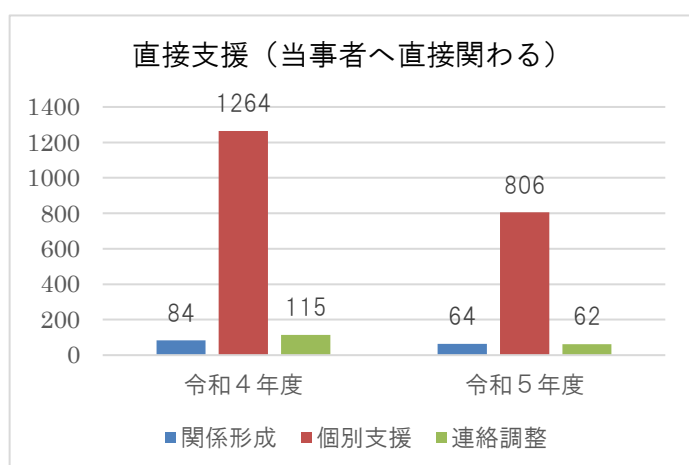
1年を通して運営支援に携わった回数が最も多いが、着目すべきところは立ち上げ支援の数である。コロナ禍で立ち上がるグループや団体は数少なく、むしろ減少の一途を辿っていた。しかし令和5年度が始まり徐々に地域で行われるイベントが戻ってきた。その中で活動を再開、新しく立ち上げるグループや団体も増えた。地域福祉コーディネーターはコロナ以前、それ以上の盛り上がりを取り戻すべく地域へと奔走した1年となった。

※関係形成：地域住民、団体・グループとの関係作りのための訪問 ※立上支援：地域団体・グループの立上げ支援

※運営支援：地域団体・グループが立上げ後の運営支援

※連絡調整：関係者との連絡調整、簡単なやり取り

◆個別支援件数



上記のグラフは令和4、5年度の個別ケースに対応した回数を表したグラフである。全体的に件数が減少している理由としては令和5年度より新型コロナウイルスが5類に代わったことにより自宅待機者等への緊急食料等の提供事業である『おたがいさま便』の対応数が令和4年の366件から令和5年度は12件まで減少した。また新型コロナウイルスの影響を踏まえた生活福祉資金の特例貸付も令和4年9月に終了した。この2点が大きな要因と考えている。しかし重層的支援体制整備事業に取組、地域福祉コーディネーターも他機関で連携して途切れない支援を行っている。

※【直接】関係形成：当事者との関係づくりのための訪問

※【直接】個別支援：支援のための訪問、相談、状況確認

※【直接】連絡調整：本人との連絡調整、簡単なやり取り

※【間接】関係形成：関係団体との関係づくりのための訪問、イベント参加、小地域エリア内会議等への参加

※【間接】個別支援：関係者との相談、会議の実施

※【間接】連絡調整：関係者との連絡調整、簡単なやり取り

重層的支援体制整備事業の全体像と全方位型アセスメントについて

主旨

令和3年4月に重層的支援体制整備事業が創設され、伊賀市社会福祉協議会は「継続的支援事業」「参加支援事業」「地域づくり」の3つの委託を受けている。

地域福祉コーディネーターは、地域課題解決に向けて、上記の「相談・参加・地域づくり」に関する支援を一体的に行っていくにあたり、事業の概要の理解を深めると共に、より踏みこんだ支援技術習得を目指し開催している。

開催概要

開催日：令和6年1月12日（金） 10時00分～16時00分

場 所：いがまち保健福祉センター愛の里 研修室

講 師：一般社団法人コミュニティーネットハピネス 代表理事 土屋 幸己 氏

参加者：伊賀市社会福祉協議会

地域支援課 地域福祉コーディネーター 13名

くらし支援課 1名

伊賀市医療福祉政策課 1名

伊賀市包括支援センター南部サテライト 2名

伊賀市こども未来課 1名

地域共生社会の実現に向けた国の動向から現状を理解し、「断らない相談支援」として、インテークとアセスメントの違い等を学ぶ。また、演習として、相談の抱える問題と課題を正確に把握する事で、連携が必要な機関やその役割を明確にする等、実際の相談受付の場面で必要となる支援技術を学ぶ。

【事例検討】「困窮しているが危機感を覚えていない夫婦への支援」

実際に地域福祉コーディネーターが関わっている事例を元に検討を行う。

ファシリテーターを講師が行ない、複雑な課題を抱える世帯の問題を仕分けて、まとめていく事で課題が明確になり具体的な解決方法や役割分担を導きだす。



研修会の様子

事例選定会議及び事例検討会議

地域支援課では、継続的支援事業として、市内6拠点に地域福祉コーディネーターを配置し、身近な地域で寄り添った伴走型支援が行なえる体制を整えている。令和5年度は相談件数が140件となっており、相談者も本人、家族、民生委員や自治会長等の地域住民など多岐にわたっている。

事例選定会議

担当エリアの相談を受ける地域福祉コーディネーターは、相談を受けたケースひとつひとつの聞き取りを行い、基本的な個人情報や相談内容等をまとめた相談受付表を作成し、その相談受付表を元に月1回「事例選定会議」を開催している。

この会議では、エリア代表のコーディネーターが集まり、当月の全てのケースを共有し、相談者の現状や課題を確認した上で、地域福祉コーディネーターによる継続的な支援が必要であるか、または課題が解決され終結として良いかどうかを選定している。

これにより、一人のコーディネーターの判断で、支援が展開される事なく、それぞれのコーディネーターが持つ専門的な視点も踏まえて、ケースを整理し、継続的な支援が必要なケースの進捗管理を適切に行えるようにしている。



事例選定会議の様子

事例検討会議

複合的な課題を持つケースなど、社内の他の課の専門職が同時に関わっているケースも多いため、他課の職員と合同で「事例検討会議」を開催している。ひとつのケースに対し、基本情報の確認や問題、課題の割り出し、必要な支援やサービスの検討を行い、解決策と役割分担を明確化している。

この会議は基本的に月1回の開催であるが、緊急を要するケースの場合は、臨時で開催する事もあり、令和5年度は12月までに10回開催されている。



事例検討会議の様子

今後に向けて

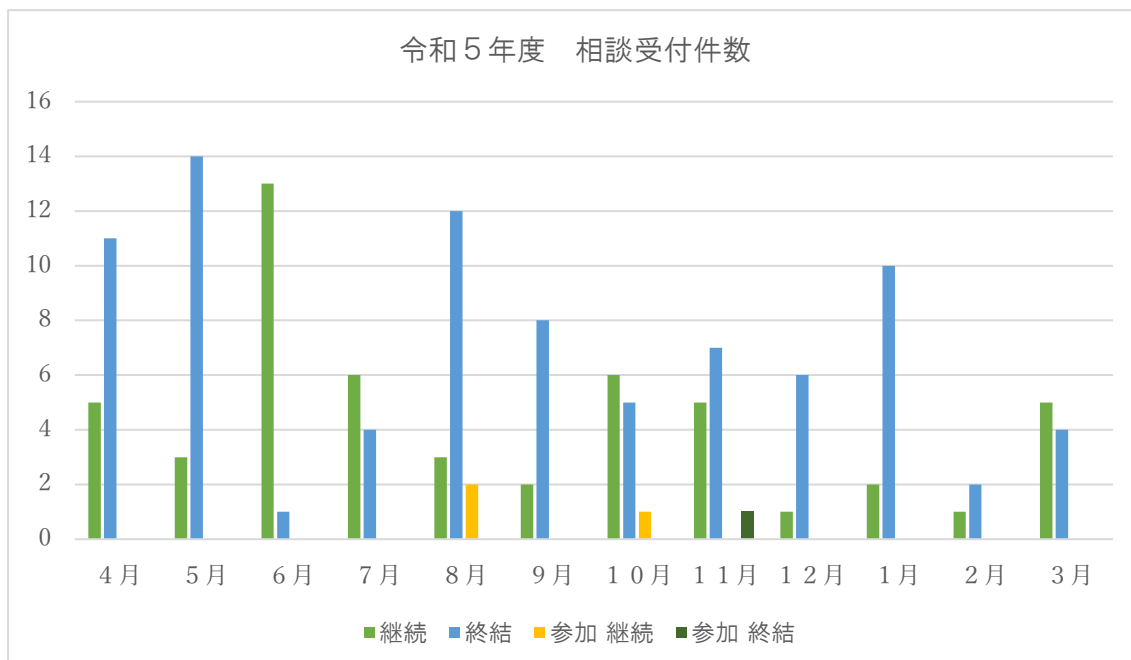
地域福祉コーディネーターに寄せられる相談は年々増加しており「介護に関する事」や「経済的な問題」の他にも「ゴミ出し」や「近隣トラブル」等、個別の問題から地域の問題に発展するようなケースも多い。

またこれら全ての問題を一つの世帯で抱えているケースも珍しくなく、問題の多様化、複合化が進んでいると考えられる。

地域福祉コーディネーターだけで解決に導く事は難しいケースも、社内連携や市の専門機関はもちろんの事、地域の民生委員や自治会長、ボランティア等と協働して、引き続き誰もが安心して暮らせる地域づくりを目指したい。

重層的支援体制整備事業 相談数・連携先等データ

◆令和5年度 月別相談受付件数（令和5年4月～令和6年3月）



令和5年度の総相談件数は、140件となっている。

グラフ上の「継続」とは、直ちに解決する事は難しいが、関係機関と連携しながら、ご本人の課題解決に向けて、地域福祉コーディネーターが継続して関わるケースのことを指している。一方「終結」は課題が解決したケースや、より専門的な機関に繋げたケースを指しており、それぞれ令和5年度の実績は「継続」52件、「終結」84件となっている。また「参加」は4件で、社会との繋がりが無い、または少ない状況にある方に対して、既存の社会資源を活用しながら、社会との繋がりを持てるように支援をしているケースを指しており、必要に応じて、新たな社会資源の構築にもつながっている。

◆相談種別について

相談内容を種類別にみると、上位となる相談は下記のとおりである。

1. 介護に関する相談（30件）
2. その他（29件）
3. 病気に関する相談（8件）
4. 経済的困窮（7件）

2番目に多い「その他」の内訳については、「近隣トラブル」

「ゴミ出し問題」「今後の生活への不安」等、多岐にわたっている。

近隣トラブルやゴミ出し問題は、本人からの相談だけでなく、民生委員や近隣住民からの相談も多く、地域での毎日の生活の安心・安全につながる課題であるため、早急な解決が期待される。また「今後の生活への不安」は高齢による免許返納や、終活など、地域課題に関する相談も多い。



◆連携先

くらし支援課	包括支援センター	障害者支援センター	生活支援課	ケアマネジャー	その他	総合計
9	38	3	1	25	24	100

地域福祉コーディネーターが相談を受け、具体的な支援を行うにあたり、連携をした関係機関は上記のとおりである。

経済的な問題を抱えているケースやひきこもりに関する相談等は、社会福祉協議会内にある「くらし支援課」と同行訪問をし、経過を共有しながら支援を行っている。

また、地域包括支援センターや障害者支援センター、ケアマネジャー等は、それぞれの専門性を持った支援が必要であるケースをつないでいる。

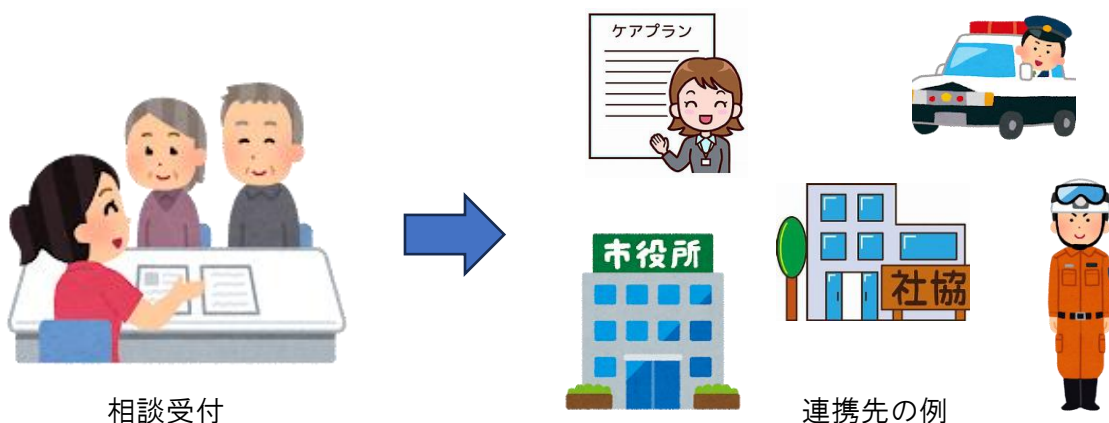
「その他」は警察（駐在所）・後見サポートセンター・特定相談事業所等が多く、地域のあらゆる機関から相談が入り、連携している。

◆まとめ

地域福祉コーディネーターは、地域へのアウトリーチをととして住民や関係団体から直接相談を受けることが多い。重層的支援体制整備事業が始まるまでは、相談記録も整備されておらず、担当者の判断や経験で関係機関へつなぎ対応をしていた。

そのような状況もあり、人事異動や担当者が変わるとケースの引き継ぎが円滑にできず継続的な支援を続けていたケースでも担当者が変わり支援が途切れることもあった。

令和4年度から相談受付票を整備し相談を受けた場合は相談記録の記入し、課内で共有をしている。相談ケースは月に1回、継続的に支援が必要なケース、終結ケースを仕分けし、支援記録も整理してあることで、担当者が変わっても円滑に支援を進めることができるようになった。令和6年度はデータベースを活用し、関係者と迅速に相談記録や情報の共有を図る。また拠点が離れていても相談記録を共有できる環境整備を進めていく。





主旨

「ひきこもり」とは、「一定期間以上社会参加のない状態」とされ、最近では「個人の問題ではなく社会課題である」ということが示されてきている。しかし、正しい認識が広まっているとは言いがたい現状にあり、伊賀市社会福祉協議会では、地域共生社会の実現に向けて、「ひきこもりで孤立しない地域をつくる」ことを目指し、①ひきこもりに対する正しい認識を広める②ひきこもりによる孤立を防ぐことを目的に、令和3年度から養成した「伊賀市ひきこもりサポーター」の活動支援を進めている。

経緯と概要

「伊賀市ひきこもりサポーター」は、第1・2期生を合わせて令和6年2月現在33名となった。令和5年度は、前年度の定例会での意見交換をもとに取り組んだ。

令和5年度の活動

6月	伊賀市民生委員児童委員連合会への啓発説明
6～2月	サポーター定例会を開催（偶数月／5回）
7～1月	各地区民生委員児童委員協議会、団体への啓発活動（14回）
8・1月	伊賀市ひきこもりを支える人のネットワークミーティング（2回）
10月	第2回虹のかけはしマルシェ出展（青山ハーモニーフォレスト）
12月	ひきこもりサポーター4市合同研修会（松阪市・伊勢市・鳥羽市・伊賀市）
1月	ひきこもり家族研修会・家族のつどい

家族会（研修と家族会の発足）

ひきこもり家族研修会・家族の集い

日 時：令和6年1月28日（日）第1部 13：30～15：15 第2部 15：30～16：30

場 所：阿山保健福祉センター（第1部：ホール 第2部：会議室）

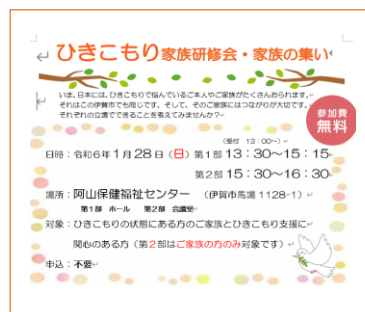
内 容：第1部 パネルディスカッション（参加者 46名）

登壇者 みえオレンジの会代表 堀部 尚之 氏

いなべ笑かどサロン世話人 鈴木 洋子 氏

経験者3名 地域福祉コーディネーター

第2部 家族懇談会（参加者：12名）



第1回 家族会

日 時：令和6年3月23日（土）13：30～15：00

場 所：くらしサポートセンターおあいこ なかまちサテライト（伊賀市上野中町）

参加者：6組（9名）およびみえオレンジの会 代表 堀部 尚之 氏・経験者

身近な地域で同じ悩みをかかえる家族同士が安心して集える場を立ち上げるべく、話し合いを重ね、家族研修会の開催をきっかけに、新たに家族会を発足することができた。

ひきこもりサポーター 定例会



ひきこもりサポーター定例会

日 時：6月19日、8月28日、10月26日、12月18日、2月29日

場 所：伊賀市総合福祉会館

内 容：先進的な活動などを知ったり、サポーターの思いや考え方の情報交換

日々の活動の共有や、研修内容をもとに意見交換をするなど、毎回真剣に取り組まれている。今年度の大きな成果として、地域福祉コーディネーターも調整を行い、担当課職員とともにサポーター自身による地域への発信ができた。

ひきこもりサポーター 地域啓発／今後に向けて

地域啓発

前年度の定例会でサポーターから「もっと私たちのことを知ってほしい」という意見があった。まずは、地域の見守りに関わる民生委員児童委員に伝えるべく、伊賀市民生委員児童委員連合会に相談・説明し、7月から11月に13地区で説明会を行った。また、身近な地域で見守りと支え合いを進める団体から依頼を受けて講話とグループワークを行い、正しい理解を促進することができた。

その他、ひきこもりサポーターと nest 利用者によるマルシェ出展を企画し、手作り作品の販売の他、来場者への「ひきこもりの正しい理解」の啓発と居場所（nest）および相談先の周知活動を実施した。



ひきこもりサポーターによる啓発の様子（右：城西地区民協／左：R4年度養成講座）



マルシェ出展
および啓発活動

今後に向けて

サポーターは、ボランティアの立場から、正しい知識を身近な地域住民に伝え、本人や家族に寄り添ってくれる心強い存在である。そんなサポーターと意見を交わし、手をたずさえ、「寄り添う」援助技術をとともに学ぶとともに、新たに発足した家族会では、家族同士が集うことで力を引き出せるような支援を目指す。

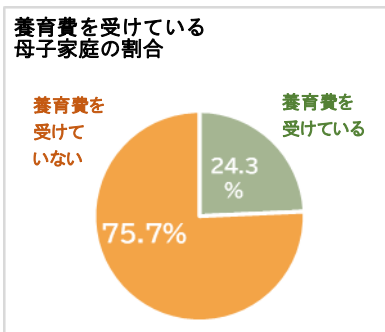
また、市の各部局と社会福祉協議会の地域福祉部門各課で役割分担し、それぞれの連携先との関係性を活かしながら受け止められる地域づくりを進めていきたい。

地域課題を解決する団体へのファンドレイジング支援について

伊賀市では年間約 1,000 人もの人口が減少している。労働人口が減少することで税収も減り、地域へ配分される予算も減少傾向にある。一方で、社会構造の変化や家族の在り方の変化、価値観の変化などにより地域課題は従来よりも深刻なケースが増加、伊賀市社協の窓口にも多数の相談が寄せられている。伊賀市社協では、令和 5 年度、地域福祉活動計画の 12 のテーマの中で、特に緊急を要する課題として「子どもの貧困」「社会的孤独・孤立」を掲げ、取り組みを進めてきた。

子どもを取り巻く環境の変化

日本では、9 人に 1 人の子どもが貧困家庭で育っているという状況があり、全国的に子どもの貧困が問題となっている。諸外国と比較しても、日本はひとり親世帯の貧困率が高く、ひとり親世帯の相対的貧困率は先進国ワースト 2 位となっている。また、母子家庭が困窮に陥る原因の一つに、離婚後に約 75%の世帯で養育費が支払われていない現状がある。



厚生労働省の「平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査結果報告」

伊賀市内でも、厳しい状況におかれているひとり親世帯は多く、伊賀市社協にも、「今日、食べるものがない」といった、相談が多く寄せられている。令和 5 年 8 月に開催したフードパントリー（食糧配布イベント）では申込者 150 世帯のうち約 7 割が子育て世帯であり、伊賀市内でも困窮している子育て世帯が多い状況が伺えた。

誰でも利用できるブックカフェと子ども食堂の立ち上げに向けて



ブックカフェスペース



キッチンスペース

令和 6 年 3 月 25 日、伊賀市の中心市街地にある新天地商店街内にある映劇ビル 1F にブックカフェ兼子ども食堂となる「だーこキッチン」がオープンした。空き店舗を改装して子どもたちに居場所と食事の提供を開始した。店舗を改装するにあたっては、地元の建築業者や住宅リフォーム業者がボランティアとして協力、製材所からは木材の寄付もあり、内装工事や本棚が完成した。食事の提供では、周辺のお店や三重県料理業生活衛生同業組合、コープみえ等からの協力もあり、無償でお菓子やパン、たまのおにぎり等のメニューを提供する。家賃もオーナーのご厚意で無料にしてもらっている。ブッ

クカフェはミステリー小説を中心にした書籍約 1,000 冊の寄付があり、話を聞いた人たちからも本が集まってきている。昨年 8 月に先行してオープンした自習室には高校生を中心に自習する学生が集まっている。

開設したダーコラボラトリの山口さんは「みなさんの協力があって、ほんとにありがたいです。周辺の高齢化率は 40%を超えています。今後は高齢者の集まるサロンや子育て中の人の交流の場としても活用してもらい、世代間交流の場にもなれば。」と話す。

開所時間は水曜日以外の平日 13 時～17 時。予約はらず、子どもたちの飲食は無料で、大人については 1 人 500 円程度の寄付をお願いしている。

地域福祉コーディネーターのかかわり

「給食だけを食べに来る小中学生が一定数いる」「家でひとりでごはんを食べている」「商店街のアーケードの地面に座り込んで塾が始まるまで勉強している学生がいる」といった課題があり、子ども食堂の開設をしたいと相談があった。

ケースステートメントを作成しながら、解決していきたいと考えている社会課題をまとめ、団体の目的や人的ネットワークなどを整理していった。そこでわかってきたこととして、元々強い人的ネットワークと情報発信力をもっていること。最も重要な課題として運営資金を確保することであることがわかってきた。

そこで、伊賀市社協関連の助成金を紹介し申請いただいた他、事業を立ち上げるにあたり、コープみえとのつなぎを行い、食料品の支援だけでなく、子どもや高齢者など地域住民が交流できるような場の構築へ向けて助成金 26 万円を獲得するに至った。また、地元の農家とのつなぎを行い、お米も寄付いただけることとなった。ケースステートメント作成を通して、社会課題を発信していく力が高まった成果と言える。「だーこキッチン」は伊賀市としては、毎日型の子ども食堂の設置は初めてとなる。今後、伊賀市社協としては連携を強化しながら困窮する子どもたちの自立に力を入れていきたい。



ケースステートメント作成の様子



3/25 オープンしたブックカフェ兼子ども食堂の様子

◆地域福祉ネットワーク会議 設置状況

地区	自治協	区・自治会数	地域福祉ネットワーク会議名	設置年月日
上野	上野東部	16	東部地域福祉ネットワーク会議	H30.9.20
	上野西部	18	上野西部地域ケアネットワーク会議	H24.3.26
	上野南部	11	地域ケア・ネットワーク会議	H21.12.21
	小 田	1	いきいきネット小田	H28.3.31
	八 幡	1		
	久 米	5	久米地域ネットワーク会議（くめの輪会議）	H29.9.14
	花 之 木	4	花之木地区福祉ネットワーク会議	H29.3.2
	長 田	9	長田地域福祉ネットワーク会議（なのはなネット）	H29.2.20
	新 居	4	新居地区ふくし情報交換会	H28.7.19
	三 田	6	三田地域福祉ネットワーク会議	H30.1.19
	諏 訪	1	諏訪住民自治会地域ケアネットワーク会議	H28.2.16
	府 中	12	府中地区福祉ネットワーク会議	H27.4.1
	中 瀬	10	中瀬ふくしネットワーク会議	H29.12.5
	友 生	10	友生地区福祉ネットワーク会議	H28.3.25
	猪 田	10	猪田地区福祉ネットワーク会議	H25.3.6
	依 那 古	9	依那古地域福祉ネットワーク会議	H30.5.18
	比 自 岐	3	比自岐地区ネットワーク会議	H26.2.3
	神 戸	7	神戸地区支え合いネットワーク協議会	H25.7.24
	古 山	7	古山地区福祉ネットワーク会議（高齢者支援状況報告会）	H24.11.8
	花 垣	5	はなまるネット	H31.3.19
	ゆめが丘	5	ゆめネット	R4.7.1
	きじが台	2	きじが台地区住民自治協議会 地域ケア部会	H28.4.1
島ヶ原	島ヶ原	9	島ヶ原地域生活環境改善会議	H26.12.10
大山田	山 田	13	「山田せせらぎ」ケアネットワーク会議	H28.3.22
	布 引	5	布引地域住民自治協議会 布引「清流の里」ケアネットワーク会議	H28.2.18
	阿 波	7	阿波地域ケアネットワーク会議「まごのて」会議	H27.12.9
伊賀	柘 植	12	つげふくしネット	H28.6.22
	西 柘 植	9	西柘植福祉ネット	H30.2.5
	壬 生 野	13	壬生野福祉ネット	H31.2.19
阿山	河 合	11	河合地域福祉ネットワーク会議	H29.12.14
	鞆 田	6	鞆田地域福祉ネットワーク会議	H30.11.12
	玉 滝	10	玉滝地域福祉ネットワーク会議	H29.4.21
	丸 柱	2	丸柱地域福祉ネットワーク会議	H28.8.11
青山	阿 保	10	阿保地区「わいらのまち」地域福祉ネットワーク会議	H31.3.27
	上 津	6	上津地区住民自治協議会地域福祉ネットワーク会議	R1.12.11
	博 要	2	博要地域福祉ネットワーク会議	H25.10.1
	高 尾	2	高尾地区地域福祉ネットワーク会議	H25.3.8
	矢 持	4	矢持地域ケアネットワーク会議	H22.1.21
	桐ヶ丘	8	桐ヶ丘地区高齢者・障がい者互助ネットワーク委員会	H22.12.19
合計	■全市(39地区)うち設置地区 (%)			38地区
				97.4%

令和5年度 地域福祉ネットワーク会議連絡会 研修会

主旨

伊賀市内の住民自治協議会同士が互いに福祉課題に対して取り組んでいる内容を情報共有し意見交換する場である。

開催概要

開催日：令和5年12月7日（木）

場 所：上野東部地区市民センター

発表者：上野東部地域住民自治協議会

会長 南 徹雄 氏

玉滝地域まちづくり協議会

福祉ネットワーク部会

部会長 川上 善幸 氏

手 法：取り組み発表+グループワーク

参加者：住民自治協議会役員等 28 名



研修会の様子

概要

【発表内容】

上野東部地区の防災の取り組みでは、自治協議会として大きく舵を取りながらの防災訓練の実施や、各自治会長や、民生委員等と町の状況に応じた防災の取り組みをご報告いただいた。

玉滝地域の生活支援サービス「おたすけ玉ちゃん」は、地域のニーズを細やかに聴き取り、それに応えていこうという活動である。特に自家用車両を用いた生活支援について参加者の関心は高かった。

【グループワークで最も多く出された地域課題に関する意見】

- ① 交通の問題。特に路線バスの廃止や高齢者の買い物の交通手段・通院
- ② 高齢者や障がい者の見守り・安否確認の方法
- ③ 住民自治協議会の次世代の担い手不足

【その他の意見や課題意識】

- ・「出合い」・「奉仕作業」と呼ばれる地域の清掃活動にも人数が集まらない
- ・自治会入り・区入りをしない住民の増加
- ・自治協間の連携事業に取り組んでいる地域がある

【地域福祉コーディネーターの所見】

連絡会の最後に、次回開催に向けてのご意見を聞いてみたところ、「成果が出ている地域の活動があれば、県内外問わずその取り組みを聞いてみたい」と言った意見が多く寄せられた。次年度に向けて、伊賀市内だけでなくとどまらず、他の市区町村の取り組みを学ぶ機会も考えている。

また、住民だけの力では解決が困難な課題については、専門的な意見も聴ける機会も必要ではないかと考えている。そのため、企業、行政、各種団体との連携も今後は重要になってくると感じている。

市民ふくし大学【基礎講座】第24期 いが見守り支援員養成公開講座
「地域共生社会実現に向けて～全ての人に居場所と役割を～」

主旨

伊賀市社会福祉協議会では、地域福祉の担い手の養成を目的に「いが見守り支援員養成講座」を開催している。生活上の困りごとがある方への支援として、また、元気なうちから住民同士が互いに支え合うしくみを構築することができると考えている。そんな一翼を担っているのが「見守り支援員」である。当会では、住民同士の助け合いの輪が広がるよう支援を進めている。

概要

1. 対象者 地域福祉に関心のある方どなたでも
2. 開催日時 令和5年10月28日(土)13:30～15:30
3. 場所 ヒルホテルサンピア伊賀
4. 講師 豊中市社会福祉協議会 事務局長 勝部 麗子 氏
5. 参加人数 100人



講演中の勝部氏

【ファンドレイジングブース設置】

社会福祉協議会が取り組む12の社会課題に対して関心を持ってもらうため、地域福祉活動計画の冊子やファンドレイジングに関する資料、PR動画が流れるタブレット端末を設置した。



ブースでの様子

【基礎講座ガイダンス】

見守り支援員は、各地域で地域食堂・子ども食堂の運営、学習支援、お買い物バス支援、草刈りや電球交換のボランティアなど多くの場面で活躍されていることを説明した。



ガイダンス風景

【勝部さんによる講演「地域共生社会実現に向けて～全ての人に居場所と役割を～」】

自らが経験した地域福祉活動の実践を具体的な活動風景が分かる写真を用いて説明された。

- ① ひきこもっていた方の社会参加の機会を作るため本人の得意なメダカの生育を活かした実践
- ② 美大生の卒業制作を不登校の子とともに進めた壁面アートづくりの実践
- ③ 定年後の男性の活躍の場づくりとして、農園での野菜作りから、芋焼酎の製造販売した実践
- ④ 「豊中めぐり」で栽培した野菜などを移動販売車に乗せて、見守りと買い物支援を兼ねた実践
- ⑤ 空き店舗を八百屋にリニューアルし、ひきこもっている方の就労の場に結び付けた実践
- ⑥ 地域住民のあらゆる方々が交流できるよう空き家を利活用し、サロンを立ち上げた実践

講演タイトルのように「全ての人に居場所と役割を」という視点で、困りごとを抱える方の想いを汲みとり、寄り添った支援が大切である。その方の趣味や得意なことを発見し、それを活かせる「場」につなぐことによって、居場所や役割を感じてもらえる活動になる。また、ボランティア活動においては、小さい力をひとつひとつ集めて大きな力に変えていくことが大切な視点である。

地域食堂連絡会・研修会

第1回 地域食堂連絡会

日 時：令和5年6月15日（木）10：00～12：00

場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②

参加者：4団体、11名

内 容：・前年度のバス視察研修の振り返りと報告
（視察先：NPO 法人太陽の家桑名こども食堂）
・グループに分かれて情報交換・意見交換、全体共有



グループワークの様子

第2回 地域食堂連絡会（バス視察研修）

日 時：令和5年10月5日（木）10：30～12：00

視察先：善西寺おてらこども食堂（桑名市）

参加者：3団体、12名

内 容：・「善西寺おてらこども食堂」代表による
取り組みについての講話
・施設見学
・意見交換



視察先での受講の様子

第3回 地域食堂連絡会（研修会）

日 時：令和6年3月22日（金）10：00～12：00

場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②

参加者：6団体、11名

内 容：「子どもの権利とアドボカシーについて」

講 師：子どもアドボカシーセンターMIE

エンパワメントみえ 志治 優美 氏



研修会受講の様子

※地域食堂連絡会への加入団体数：10団体（令和6年3月末現在）

令和5年度 夏休みふくし体験教室

7月24日から8月25日の夏休み期間、夏休みふくし体験教室を実施した。

これは、以前から伊賀市社会福祉法人連絡会との共催事業として開催していたが、コロナ禍により中止していたため、4年ぶりの開催となった。

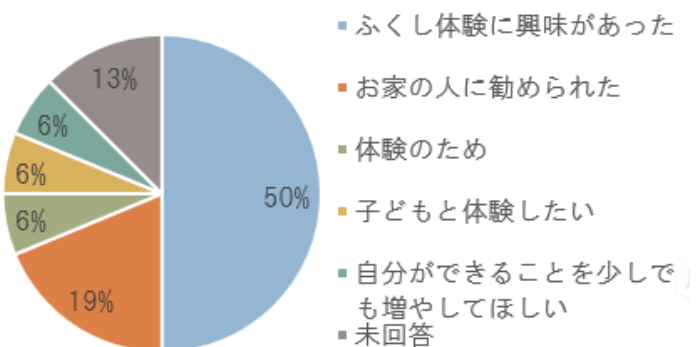
令和5年度は、市内の福祉施設11施設で、のべ44人が施設を利用されている方々とともに、レクリエーション活動やふれあい交流を行った。

「夏休みふくし体験教室」に申し込んだきっかけは？

事前アンケートにて、申し込んだきっかけを尋ねると、「ふくし体験に興味があった」が半数を占め、福祉に関心のある市民が一定数いるということが分かった。

また、「体験する目的・学んでみたいこと」を訪ねると、「中学生の時にに行けるはずだった保育実習がなくなってしまい、興味がある仕事だったので、体験できる機会を待っていました」との回答もあり、本事業が、コロナ禍による制約を受けてしまった学生からも必要とされている事業であるということを再認識した。

◆申し込んだきっかけ



デイサービスセンターで「夏休みふくし体験教室」に参加した小学生を取材！

Aさん（小4）は、従妹のBさん（小3）と共に参加し、利用者のみなさんとぬり絵や体操などを楽しんだ。

Aさんが、塾で講師をしていた利用者のCさんに夏休みの宿題の算数を教えてもらい、「わかりやすかった」と喜んでいたので印象的であった。



体験教室での様子

Bさんは、「お風呂っていくつあると思う？正解は3つ！」「車いすに乗っている人もいたよ」など、初めて知ることたくさんあったようで、「来年もまた行きたい」と、次年度の参加意欲も示してくれた。

令和6年度も「夏休みふくし体験教室」の事業を継続していく

令和5年度の参加者アンケートを見てみると、「来年も参加したい」との回答が圧倒的多数を占めた。ふくしを身近に感じてもらえるきっかけを継続的につくり、地域を基盤とした福祉教育の一環となるよう、伊賀市社会福祉法人連絡会と連携し、今後も事業を継続していきたい。

令和5年度 福祉教育推進協議会 研修会及び福祉教育推進協議会

主旨

伊賀市においては、「子どもたちの福祉の学びを支援する取り組み」と「住民主体の地域福祉を進める取り組み」を共にすすめる「地域を基盤とした福祉教育の推進」を目指して策定した「福祉教育推進指針」を推進するため、地域福祉と教育の連携による研修、研究、協議の場として実施する。

概要 福祉教育推進協議会 研修会

日 時：令和6年2月29日（木）

場 所：大山田福祉センターふれあい広場

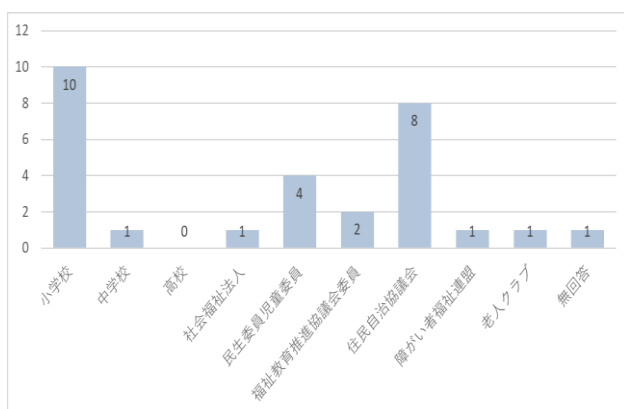
参加者：32名

- 内 容
- ・福祉教育指針について
 - ・防災ハンドブックの説明
 - ・新聞スリッパ・がれき体験
 - ・ふろしきリユック



福祉教育推進協議会研修会の様子

■所属等をお聞かせください



福祉教育推進協議会研修会 アンケート結果

- ・色々な所属の方の意見を聞くことができて良かったです。
- ・災害はいつ起こるか分からないからこそ、防災についても一度考え直すきっかけとなりました。
- ・なかなかアットホームな雰囲気楽しく防災グッズづくりやお話を聞くことができました。
- ・「福祉教育」の言葉、聞き慣れていなかったのが勉強でした。

第1回 福祉教育推進協議会

日 時：令和5年7月28日（金）14:00～15:30

場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②

参加者：福祉教育推進協議会委員

内 容：役員改選

- ・令和4年度 事業報告及び
- ・令和5年度 事業計画について
- ・福祉教育プログラムについて
- ・福祉教育推進協議会研修会について

第2回 福祉教育推進協議会

日 時：令和5年11月24日（金）14:00～15:30

場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②

参加者：福祉教育推進協議会委員

内 容：夏休みふくし体験教室 実施報告

- ・福祉教育プログラムについて
- ・福祉教育推進協議会研修会について

令和5年度 福祉教育プログラム実践（小学校）

※社協共催分

小学校	実施したプログラム内容	実践回数
上野西小学校	・一分間ゲーム ・社協のしごと ふくして何？	1
	・出会いの授業(井戸さん)	1
	・出会いの授業(大橋さん)	1
	・出会いの授業(伊倉さん・橋本さん)	1
上野東小学校	・赤い羽根共同募金って何だろう？	1
久米小学校	・出会いの授業(大橋さん)	1
上野北小学校	・一分間ゲーム ・社協のしごと ふくして何？ ・ユニバーサルデザイン	1
	・出会いの授業(大橋さん)	1
府中小学校	・一分間ゲーム ・ユニバーサルデザイン体験 ・車椅子体験 ・福祉車両体験 ・手話体験 ・高齢者疑似体験	1
	・出会いの授業(大橋さん)	1
成和東小学校	・社協のお仕事紹介「みんなが居心地がいい」って何だろう、を考える。」	1
	・出会いの授業(大橋さん)	1
上野南小学校	・赤い羽根共同募金って何だろう？(社協の仕事)	1
友生小学校	・ユニバーサルデザイン	1
三訪小学校	・一分間ゲーム ・ユニバーサルデザイン	1
	・出会いの授業(大橋さん)	1
	・防災講座	1
柘植小学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
西柘植小学校	・聴覚障がい者との出会いの授業(手話を学ぶ・当事者の話を聞く・手話通訳)	3
	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
	・タッピングタッチ研修	2
壬生野小学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
島ヶ原小学校	・社協のお仕事紹介	1
	・地域の社会資源訪問(デイサービス利用者との交流)	2
	・ユニバーサルデザインって何だろう	1
	・出会いの授業(大橋さん)	2
大山田小学校	・出会いの授業(大橋さん)	1
	・企業の社会貢献活動、SDGsのお話(地域NPO団体と同行)	1
青山小学校	・社協のお仕事紹介及び施設見学	1
	・あおやま ちいき・ふくしクイズ	1
計		35

令和5年度 福祉教育プログラム実践（中学校）

※社協共催分

中学校名	実施したプログラム内容	実践回数
柘植中学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
霊峰中学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
計		2

令和5年度 福祉教育プログラム実践（高等学校）

※社協共催分

高校学校名	実施したプログラム内容	実践回数
伊賀白鳳高等学校	・アイスブレイク ・クロスロード ・ユニバーサルデザインってなに？ ・お☆ふくろめし ・新聞スリッパ&がれき体験 ・ぼうさいダッグ ・風呂敷リュック ・非常持ち出し袋 ・レクリエーション体験 ・出会いの授業（福祉のお仕事紹介）	6
上野高校	・伊賀市の社会課題や社協について	2
計		8



お☆ふくろめしの体験風景



身近なユニバーサルデザイン

令和5年度 福祉教育プログラム実践（専門学校）

※社協共催分

専門学校名	実施したプログラム内容	実践回数
岡波看護専門学校	・クロスロード ・講義（社協が取り組む地域支援活動・NASAゲーム ・地域福祉活動計画と緊急支援活動）	1
計		1



講義風景



グループワークの様子

令和5年度 福祉教育プログラム実践（地域）

エリア	自治協	自治会 区	実施したプログラム内容	実践 回数
上野	上野 東部		・ 上野東部地域防災フェスタ…新聞スリッパ&がれき体験・ぼうさいダック	1
			・ 上野東部地域福祉ネットワーク会議…クロスロード	1
		田端町	・ 田端町いきいきサロン…非常持ち出し袋・風呂敷リュック 新聞スリッパ&がれき体験	1
		緑ヶ丘	・ 緑ヶ丘のひまわり会…非常持ち出し袋、風呂敷リュック 新聞スリッパ&がれき体験	1
		緑ヶ丘 本町	・ 緑ヶ丘本町…非常持ち出し袋、ぼうさいダック	1
			・ みなのか…介護保険サービスについて	1
	新居	西高倉	・ 防災訓練…非常持ち出し袋・段ボールトイレ・風呂敷リュック 新聞スリッパ&がれき体験	1
	依那古		・ 依那古地区住民自治協議会 …防災講座・新聞スリッパ・ふろしきリュック・歩一歩体操	1
	依那古		・ 依那古地区住民自治協議会…防災すごろくゲーム	1
	依那古		・ 依那古サロン交流会…福祉教育プログラムの説明	1
	依那古	森寺	・ 森寺いきいきサロン…防災すごろくゲーム	1
	依那古	下郡	・ いきいき体操クラブ …防災講座・新聞スリッパ・ふろしきリュック・非常持ち出し袋	1
	神戸		・ 神戸区支え合いネットワーク協議会地域会議に関する合同交流会 …地域福祉ネットワーク会議とは	1
	神戸		・ 神戸地区支え合いネットワーク協議会…地域食堂の歩み	1
	神戸	下神戸	・ 下神戸区支え合いネットワーク地域会議 …防災講座・新聞スリッパ・ふろしきリュック・非常持ち出し袋	1
	神戸	朝日ヶ 丘町	・ いきいきサロン朝みどり会…学ぼう 元気暮らしのポイント	1
大山田	阿波		・ 阿波地域ケアネットワーク会議「まごのて会議」 …地域福祉ネットワーク会議とは&地区人口統計データ情報提供	1
青山	阿保	青山 羽根	・ いこいこサロン青山羽根…防災講座	1
	博要		・ 博要地域福祉ネットワーク会議…伊賀市社会福祉協議会の取り組みについて	1
	上津		・ 上津地域福祉ネットワーク会議 …伊賀市社会福祉協議会の取り組みについて 地域での見守りについて	1
そ の 他			・ 青山地区民生委員児童委員協議会…介護保険制度について	1
			・ 丸山地区民生委員児童委員協議会…介護保険制度について	1
			・ 福祉教育推進協議会…防災ハンドブック・新聞スリッパ&がれき体験 ・ ふろしきリュック	1
			・ 伊賀市ユニバーサルデザイン研修会（伊賀市役所） …ユニバーサルデザイン講義・UDに触れる・UD発明家になる	1
計				24



福祉教育プログラム実施内容の実績

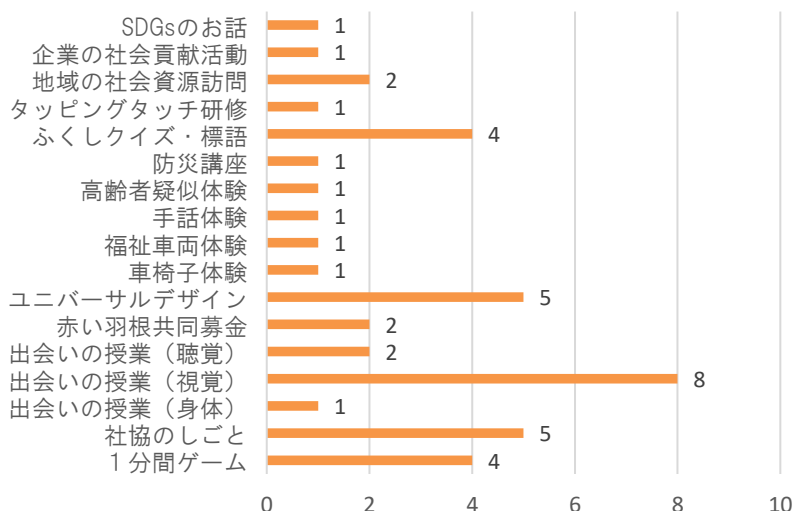
◆小学校での福祉教育プログラム実績 35回

小学校からの福祉教育プログラムの依頼としては、出会いの授業が一番多い。出会いの授業の内容が、聴覚・視覚・身体等と分かれており、選択するカテゴリーが複数あることも関係していると考えられる。

小学校では、色々な方との出会いや体験等を通じて、感じたことをどう活用していくか考える内容のものが多いと考えられる。

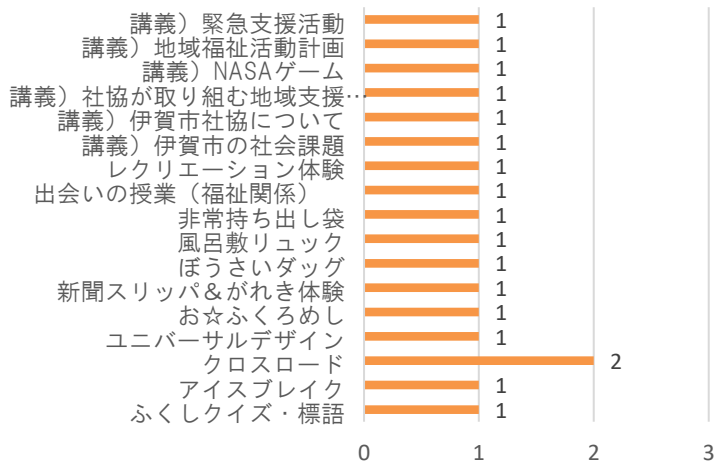
また、社協のしごと内容や赤い羽根共同募金、ユニバーサルデザインについても、興味・関心を持ち依頼があることで、社協について啓発できる良い機会となっている。

小学校でのプログラム内容



◆中学校・高等学校・専門学校での福祉教育プログラム実績 11回

中学校・高等学校・専門学校でのプログラム内容



中学校・高等学校・専門学校からの福祉教育プログラムの依頼としては、クロスロードが多かった。講義を通じて学んだことや感じたことで、将来を考えるきっかけになったプログラムもあるかもしれない。

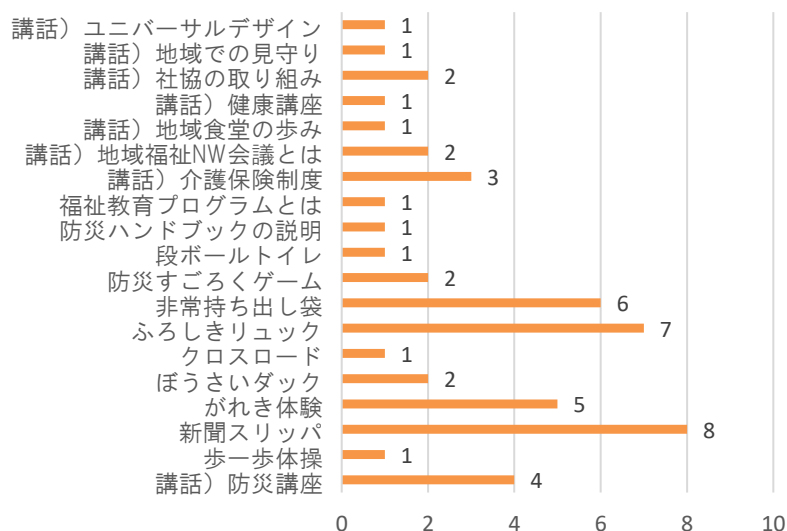
また、出会いの授業では将来をイメージしやすい方たちとの出会いを、体験等では、さまざまな状況に自分が遭遇した時に、自分はどう動くかを考えるプログラム等、なるべく将来的に活かせるプログラム提供に努めている。

◆地域での福祉教育プログラム実績 24回

地域からの福祉教育プログラムの依頼としては、防災の話や身近なもので作れる新聞スリッパや風呂敷リュック、段ボールトイレ等のグッズづくり体験が1番多いことから、防災に関して関心が高い地域が多いことがうかがえる。

また、見守り活動や地域課題について考える内容の依頼も多く、地域課題の解決に向けて模索している地域も多い。

地域でのプログラム内容



FUN・FAN プロジェクト～伊賀市若者会議と社協との連携・協働による事業～

【経緯】伊賀市の若者会議のメンバーに地域づくりや福祉活動に参画してもらうことで、若者の発想を取り入れ、多くの若者に福祉活動に参画してもらいたいとの思いを伊賀市医療福祉政策課に相談した。

令和5年度に若者会議の連携・協働による事業にエントリーすることになり、福祉活動や地域づくりに関心のある若者会議5名のメンバーと一緒に FUN・FAN プロジェクトをすすめていくことになった。

【若者会議との連携の目的】若い世代、シニア世代を含む全世代が活躍できる場づくり、居場所づくりを目指すための事業づくりを行う。

【令和5年度の内容】地域課題に対する共通認識を持って、社会課題解決を目指す。福祉のイメージや枠組みにとらわれない事業の企画や担い手育成を若者会議のメンバーと一緒に考える。

一緒に楽しめること、わくわくすることを企画（FUN）

その次のステージとしては取り組みに共感してもらえる人
一緒にする仲間づくりをすすめる（FAN）



フードパントリーに参加したメンバー

若者会議メンバーは普段、仕事や学校に通っていること、伊賀市外の方もメンバーに
いるため、夜の8時くらいからオンラインを活用し集まった。

令和5年度の活動

- 6月 FUN・FAN プロジェクトメンバー顔合わせとプロジェクトについて
- 7月 社会課題の共有（居場所、人材育成）
- 9月 社会課題の共有（支え合いの基盤）
- 11月 課題の共有と取り組み（子どもの貧困）
- 12月 フードパントリー参加（若者会議メンバー）
- 2月 情報交換、来年度以降の活動について

【今後について】若者会議との協議でもわかってきたことは、やりたいことがあっても進め方がわからない、漠然とした不安があって生活している若者がたくさんいることがわかった。

令和5年度は地域課題や社協が進める事業の共有し、若者会議メンバーからたくさんの発想や情報を得る機会となった。また社協が実施するフードパントリーなどの事業にもボランティア参加してもらった。

令和6年度以降のプロジェクトは若者会議メンバーも一緒に楽しめ、わくわくできることを企画し、更に次のステージでは共感してもらえる仲間を増やしていくことをプロジェクトでは意識し協議をすすめていく。また協議から見えた解決すべき課題や取り組みは第5次の地域福祉活動計画へも反映していきたい。

FUN・FAN プロジェクト

①支え合いの基盤となる新たなツールの創出

デジタル化が進んでも、基本的な人同士の関係や、人が「こうなったら嬉しい」という感情の部分はあまり変わらないと伊賀市社協は考える。今回はじまった「FUN・FAN プロジェクト」は、私たち社協の使命である、多くのさまざまな人と人とをつなぐ新たな一歩になったと実感している。

一緒に話し合った一例として、県外の銭湯をリノベーションして地域で活用したケースについて若者会議のメンバーから色々な意見を聞かせてもらった。具体的なツールを創り出すところまでは時間を要するが、地域で昔から培われてきたつながりや助け合いの仕組み（ツール）に新たな視点を入れて話し合える良い兆しを感じている。

FUN・FAN プロジェクト

②既存ではいなかった人材の育成及び活用

人材育成班では、移住者や外国籍の方々など、新たな分野から地域の担い手となり得る方々のボランティア活動に関する思いを聞くところからスタートした。

今年度は、「外国人防災リーダー教室」や「国際交流フェスタ」などへ参加し、文化や風習の違いやボランティアの捉え方についてヒアリング調査を行った。そんな中、「祖国にいる時も国に恩返しをしたいと思っていたので、日本でも貢献したいと思っている。」「介護やお年寄りのお手伝いに興味があるのでボランティアをやってみたい。」との思いがあることがわかった。



外国人防災リーダー教室 研修先にて

FUN・FAN プロジェクト

③住民が集う居場所となるプラットフォームづくり

プラットフォームの一つとして、全国的にもこども食堂や地域食堂への関心も高まりつつあり、伊賀市内でも広がりを見せている。今年度は新たに 10 代の居場所やブックカフェ&地域食堂併設の学習スペース、医療関係職が立ち上げたカフェなど、様々な思いから立ち上げを決意した団体の居場所開設に携わらせていただいた。

関心をもつ視点や、居心地が良いと感じる要素は人それぞれである。だからこそ、多様な居場所を作ること、自分にあう場所を見つけられる可能性が増えるのではないだろうか。そこで、若者会議のメンバーとの会話を通じて、楽しみながら参加することで課題解決につながるような居場所づくりへのヒントを得たいと考える。

今後は、ヒントを活かしつつ、若い世代とともに活動し、振り返ることを繰り返しながら、多様なプラットフォームづくりを進めていきたい。



10 代の居場所の一場面



暮らしの保健室 外観

令和5年度 フードパントリー

社会福祉協議会では、令和2年から年に数回フードパントリー（食糧配布会）を開催している。

令和5年度には右記のとおり実施し、市内にお住いのコロナや物価高騰の影響を受けている世帯に寄り添い、活動を継続した。

この取り組みには、「無料で食糧等を提供するとともに、相談支援につなぐことにより、孤立を防止する」という目的がある。

実施内容	実施日	申込者数
お米パントリー	6月18日（日）	112 世帯 353 人
フードパントリー	8月6日（日）	150 世帯 485 人
フードパントリー	12月24日（日）	159 世帯 516 人

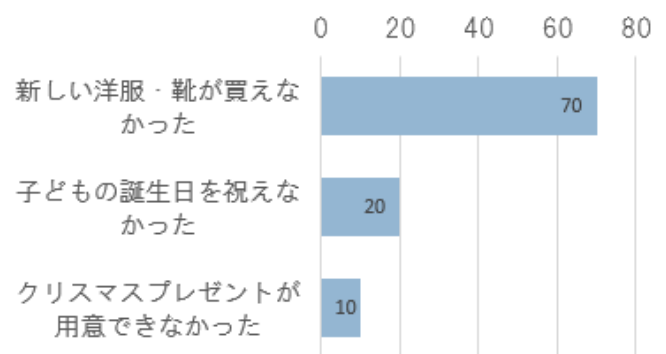
浮き彫りとなった子育て世帯の貧困状況

申込時のアンケート結果を見ると、申込者の約7割が子育て世帯であり、伊賀市内でも生活に苦しんでいる子育て世帯が多い状況が伺える。

そして、12月に実施した参加者アンケートの結果、子育て世帯のうち、約7割が「新しい洋服・靴が買えなかった」、2割が「子どもの誕生日を祝えなかった」、約1割が「クリスマスプレゼントが用意できなかった」と回答しており、子育て世帯の貧困状況が浮き彫りとなった。

また、物価高騰などで支出を抑えるところが食費しかなく、「1人当たり1日100円程度の食費で生活している」という家庭もあり、社会福祉協議会として今後、子どもの貧困問題に力を入れていくことの必要性を痛感した。

金銭的な理由などで経験したこと
※複数回答



令和6年度もフードパントリーを開催していく

フードパントリーを実施するためには、社会福祉協議会の職員だけですべてをこなすことは難しく、お米をはじめ、家庭内の余剰品を寄付してくださる地域住民や地元企業、当日ボランティアスタッフとして活動に参画してくださる民生委員児童委員・伊賀市社会福祉法人連絡会・外国人防災リーダー等の協力があってこそ活動を継続できているのだと常々実感している。

社会福祉協議会では、今後も地域みなさまに助けをいただきながら、フードパントリーの取り組みを通して、子育て世帯をはじめ、物価高騰等の影響を受けている世帯に寄り添った活動を継続していく。



スタッフとボランティア

地域福祉コーディネーター活動報告会

地域福祉コーディネーターが誕生して今年で8年が経過した。今年度は初めての試みとして、市内各地域における地域の福祉課題の解決に向け、どのようにして地域住民の皆様と共に活動を進めているのか、さまざまな地域での地域福祉コーディネーターの取り組みを報告し合い、その活動をもとに情報を共有し意見交換を行うことで、それぞれの課題を明確にし、「どのように克服しようとしているのか」「どのようにすべきか」等に目を向け、ヒントを探り、支援や活動実践に活かしていけるよう、学び合うことを目的として開催した。従来の活動報告書にとどまらず、法人内役職員や行政職員への共有・共感をめざし、助言者からの助言を得つつプレゼン形式での報告会となった。

日 時 1回目：令和6年2月12日（月・祝）午後
2回目：令和6年3月1日（金）午後

場 所 伊賀市総合福祉会館 会議室①②

助言者 日本福祉大学 学長 原田 正樹 氏
皇學館大学 現代日本社会学部

准教授 大井 智香子 氏

- 内 容**
1. 重層的支援体制整備事業の報告
(協議体コーディネート事業・地域づくり事業・参加支援事業・継続的支援事業)
 2. 地域福祉コーディネーターの取り組み発表
 3. 助言者・まとめのコメント

活動報告会の様子



助言者のお二人

【助言者からのコメント】

地域包括支援（共生社会）の枠組みのなかの重層的支援体制整備事業との差別化・相談から参加支援・地域づくりのためのつながりのある支援のあり方・根拠（エビデンス）をもとにした取り組みの必要性、移住者等を含む地域住民（地域）の枠組みの捉え方等、多くのご指南をいただいた。アプローチにより、地域がどのように変容したか、住民の意識や行動はどのように変わったか、支援のプロセスや地域の変容を、評価・検証できることが重要で、より専門性をもった支援が求められること、そんな地域が1つでもふえる、そんな地域支援のあり方、そのしくみづくりが必要である。

【感想】

はじめての試みに挑戦できたことは大きな一歩となったと感じている。報告については、担当者を中心にアウトラインを定め統一フォーマット作成からはじまり、ベテラン職員のみならず新人職員も含め全ての職員が挑んだ。目的・内容・考察・検証（アウトプット・アウトカム）を踏まえ、今後に向けた展望等、コミュニティーソーシャルワーカーとしての視点の重要性や活動実践の気づきや振り返りを行える大変貴重な良い機会となった。見せ方や伝え方の工夫により、プレゼン力やスキルアップにもつながった。これを機に、継続的な活動実践の取り組みを拡大・充実していく。

寄稿 地域福祉コーディネーターへのメッセージ

「伊賀流 “知的資源” のはぐくみ術」

皇學館大学
現代日本社会学部准教授
大井 智香子



地域福祉コーディネーターの活動報告書の刊行が今年で6年目を迎えました。令和5年度は、初の試みとなる地域福祉コーディネーターの活動報告会が実施されました。限られた時間の中で事業実践をわかりやすく説明するためには、適切な資料や伝達方法の工夫が不可欠です。地域福祉コーディネーターの皆様にとって、この新たな取り組みは、日頃の業務を振り返り、成果を確認する貴重な機会となったことでしょう。

2年前の報告書でも触れましたが、事業を推進しながら、その活動を記録し発信し続けることは容易ではありません。取り組みのプロセスを文書化しておくことで、経験や関わった人たちの思いが記録となって受け継がれます。活動報告書の積み重ねは、担当者の異動に関係なく、「なぜ」「いつから」「どのように」の理解に役立つ貴重な資料となり、社会福祉協議会（以下、社協）だけでなく、伊賀市のみなさんにとっても貴重な知的資源にもなっています。

第4次 伊賀市地域福祉活動計画策定にあたりロジックモデルを取り入れたことで、伊賀市社協ではミッション重視の事業展開が推進されています。ロジックモデルとは、組織の目標達成に向けた活動や成果を明確にするためのフレームワークです。必要な事業や活動を系統的に示すことができ、事業計画の透明性と効率性が著しく向上しました。地域福祉コーディネーターの活動報告会でも、「なぜこの事業が必要なのか」「目標に向けてどのように進めるのか」という点が明確に説明されていました。

次なる重要な課題は、評価です。ミッション重視の計画に基づいて事業を推進した結果、何がどのように変容したのか、質的な評価が期待されています。事業推進と同時に、住民のみなさんの活動に伴走しつつ、客観的な視点を保ち、変化に気づき、記録することは地域福祉コーディネーターだからこそできる記録です。その記録が新たな知的資源となり、プロセス自体が新たな価値を生む実践となります。伊賀流“知的資源”のはぐくみ実践に、これからもご一緒させてください。

最後に、伊賀市社協のみなさん、一人で全てを背負い過ぎないで。しんどいときにはわかちあってほしいです。わかちあうのは事業所のなかだけではないですよ。みなさんが苦心して執筆されたこの報告書を読み返してみてください。こんなにも多くの事業や活動を通して出会った方たちのことを、しんどいときにこそ思い出してほしいです。伊賀にお住まいのみなさま、関係機関のみなさま、そして遠くから伊賀に思いを寄せてくださっている方たちも、みんなが伊賀流“知的資源”のはぐくみメンバーなのだから。頼り頼られ、助け助けられる関係を、もっと縦横無尽に。

令和6年6月発行

令和5年度 地域福祉コーディネーター活動報告書

編集・発行 伊賀市社会福祉協議会

〒518-0829

三重県伊賀市平野山之下380番地5

伊賀市総合福祉会館1館

☎0595(21)5866 / FAX0595(26)0002

